

命売ります

……羽仁男は、目をさまして、まわりがひどく明るいので、天国にいるのかと思った。しかし後頭部にきつい頭痛が残っている。天国で頭痛がするわけはあるまい。

まず見えたのは、磨ガラスの大きな窓だった。何も飾りのない窓で、あたりがむやみに白っぽい。

「気がついたようですよ」と誰かが言った。

「まあ、これでよかった。人助けをしたと思うと、一日気分がいいですよ」

羽仁男は目をあげた。看護婦と、一人の消防隊員の制服を着たずんぐりした男が立っている。

「そのまま。そのまま。まだ乱暴に体を動かさしちゃいけません」

と看護婦が彼の肩先を押えた。

羽仁男は自分が自殺に失敗したのを知った。

.....

彼は終電車の国電の中で大量の睡眠薬を呑んだのだった。正確に言うと、駅の水呑場
で呑んでから乗り込んだのだが、ガラんとした座席に横たわると、それからあとはわか
らなくなってしまうた。

考えに考えた末の自殺ではなく、たしか、その夕方、いつも夕食をするスナックで夕
刊を読んでいるあいだに、急に死にたくなつたのだった。

「外務省職員がスパイ。日中友好協会など三ヶ所を手入れ。マクナマラ長官転出本しま
り。スモッグ都内を包む、この冬初の注意報。羽田空港爆破の青野、『極悪』と無期求
刑。トラック線路に転落、貨車と衝突。死者の心臓大動脈弁、少女への移植に成功。九
〇万円をわしづかみ、鹿児島島の銀行出張所に強盗」(十一月二十九日付)

それは判で捺したような日課であつて、格別変つたことはなかつた。

彼はその記事のどれにも全然感動しなかつた。

それから、ピクニックへでも行こうというように急に自殺を考えたのだが、強いて理
由をたずねると、全然自殺の理由がなかつたから自殺したとしか考えようがない。

失恋は別にしていず、よし失恋しても、自殺をするような羽仁男ではなかつた。金に

もさしあたり大して困っていたわけではない。彼の職業はコピー・ライターで、テレビのコマーシャルの、五色製菓の胃の薬「スツキリ」の、

「スツキリ

ハッキリ

コレッキリ

のんだと思えばもう治る」

などというのは彼の作品だ。

独立しても結構やって行けるほど、才能もみとめられているが、彼には独立する気は毛頭ない。トウキョウ・アドという会社に勤めて、そこから相当の月給をもらっているだけで満足している。そしてきのうまでは彼はたしかに、精励なまじめな社員だったのである。

そうだ。考えてみれば、あれが自殺の原因だった。

実に無精な恰好で夕刊を読んでいたので、内側のページがズルズルとテーブルの下へ落ちてしまった。

あれを、何だか、怠惰な蛇が、自分の脱皮した皮がズリ落ちるのを眺めているように、眺めていた気がする。そのうちに彼はそれを拾い上げる気になった。打捨てておいてもよかったのだが、社会的慣習として、拾い上げるほうがよかったから、そうしたのか、

いや、もっと重大な、地上の秩序を回復するという大決意でそうしたのか、よくはわからない。

とにかく彼は、不安定な小さなテーブルの下へかがんで、手をのばした。

そのとき、とんでもないものを見てしまったのだ。

落ちた新聞の上で、ゴキブリがじっとしている。そして彼が手をのばすと同時に、そのつやつやしたマホガニー色の虫が、すごい勢いで逃げ出して、新聞の、活字の間に紛れ込んでしまったのだ。

彼はそれでもようよう新聞を拾い上げ、さっきから読んでいたページをテーブルに置いて、拾ったページへ目をおした。すると読もうとする活字がみんなゴキブリになっ
てしまう。読もうとすると、その活字が、いやにテラテラした赤黒い背中を見せて逃げてしまふ。

『ああ、世の中はこんな仕組になってるんだな』

それが突然わかった。わかったら、むしろように死にたくなってしまったのである。

いや、それでは、説明のための説明に墮しすぎている。

そんなに割り切れていたわけではない。ただ、新聞の活字だってみんなゴキブリになっ
てしまったのに生きていても仕方がない、と思ったら最後、その「死ぬ」という考え
が頭にスッポリはまってしまった。丁度、雪の日に赤いポストが雪の綿帽子をかぶって

いる、あんな具合に、死がすっかりその瞬間から、彼に似合ってしまったのだ。

それから、何だかたのしくなつて、薬屋へ寄つて睡眠薬を買い、すぐ呑むのが惜しくて、三本立の映画を見て、出て来て、ときどき行くハント・バアをひやかした。

となりに坐つた、厚ぼつたい肉体の、どこもかしこも感じの鈍そうな娘には、一向食指が動かなかったが、

「僕、これから死ぬところなんですよ」

と告白してみた気が起きて困つた。

彼はちよつと肱で、彼女の部厚い肱を押した。娘は、チラとこちらを見てから、何か途方もない努力を要するように、椅子の上で体をもものぐさにこちらへ廻した。そして、^{いも}諸が笑つたような感じで笑つた。

「こんばんは」

と羽仁男が言った。

「こんばんは」

「君、きれいだね」

「うふふ」

「その次僕が何を言うかわかる？」

「うふふ」

「わかりやしないだろう」

「まるきしわからないわけじゃないわ」

「僕、今夜これから自殺するところなんだよ」

娘はびっくりする代りに、大口をあけて笑った。その笑った口の奥深く、裂きスルメの一片をほうり込んで、笑いながらいつまでも噛んでいた。スルメの匂いが羽仁男の鼻のまわりにつきまとった。

そのうち友だちが来たらしく、彼女は大仰に手をあげて、挨拶もせず羽仁男のそばから立って行ってしまった。

——そこで羽仁男も一人店を出たが、自分の死が信じられなかったことに妙に腹を立てていた。

まだ時間が十分あったけれど、一度決めた「終電車」ということにこだわって、何とか時間つぶしを考えなければならなかった。パチンコ店に入って、パチンコをはじめた。いくらでも玉が出た。人生はもうおしまいだというのに、あとからあとから玉が出るといふのは、何かからバカにされているようである。

やっと終電車の時間になった。

羽仁男は駅の改札口に入って、水呑場で薬を呑んでから、電車に乗り込んだのである。